Chapter 36 : **ビーチパーティー Part 2**

夕方が黄金の時間に移り変わると、フレアオンは新作の激辛料理、カニ肉の串焼きを誇らしげに披露した。完璧に焦げ目がつき、溶岩ソースが滴っている。パーティーは歓声をあげたが、砂浜にカリッという音が響いた。

近くの日陰で無邪気に昼寝をしていたクラブルはハッと目を覚ました。空気を嗅ぎ、目を細めて踏み出すと、フレアオンのグリルに焦げたカニの殻が残っているのを見つけた。

「この殻はなんだ!?」クラブルは大声をあげた。

無邪気なフレアオンは指をなめて言った。「カニったら最高だろ？」

間違いだった。

怒りに任せてクラブルはフレアオンをつかみ、激辛トングを握ったまま、今日2回目の海投げをかました。

他のイーブイ進化たちは凍りついた。アンブレオンは本を置き、エーフィは眉を上げ、ニンフィアは飲みかけの飲み物を飲むのを止めて驚いた。

しかし、本当の黒幕は誰も疑わなかった…

ジョルテオンはこっそりカニを材料に勧めており、無邪気にビーチミュージックのボリュームを上げていた。

一方、水着のままのシャワーズはクラブルをにらみつけた。クラブルは後ずさり始めたが、彼女はすでに逆流を召喚し、水のエネルギーでクラブルを潮流に逆らって川上に流し、溺れさせずにしっかりとメッセージを送った。虫・岩タイプで水2倍弱点？ メッセージは確かに届いた。

フレアオンは海でびしょ濡れのマシュマロのように漂い、弱々しく手を振っている。

シャワーズはため息をつき、「70回目の正直ね」とつぶやき、再び飛び込んだ。

またしても抱きかかえての救出。再び頬を赤らめる。ジョルテオンのラジオからロマンチックな曲が流れる。

そして彼女の見えない記録帳にまた一行が刻まれた：

「彼氏救出回数：70回目」